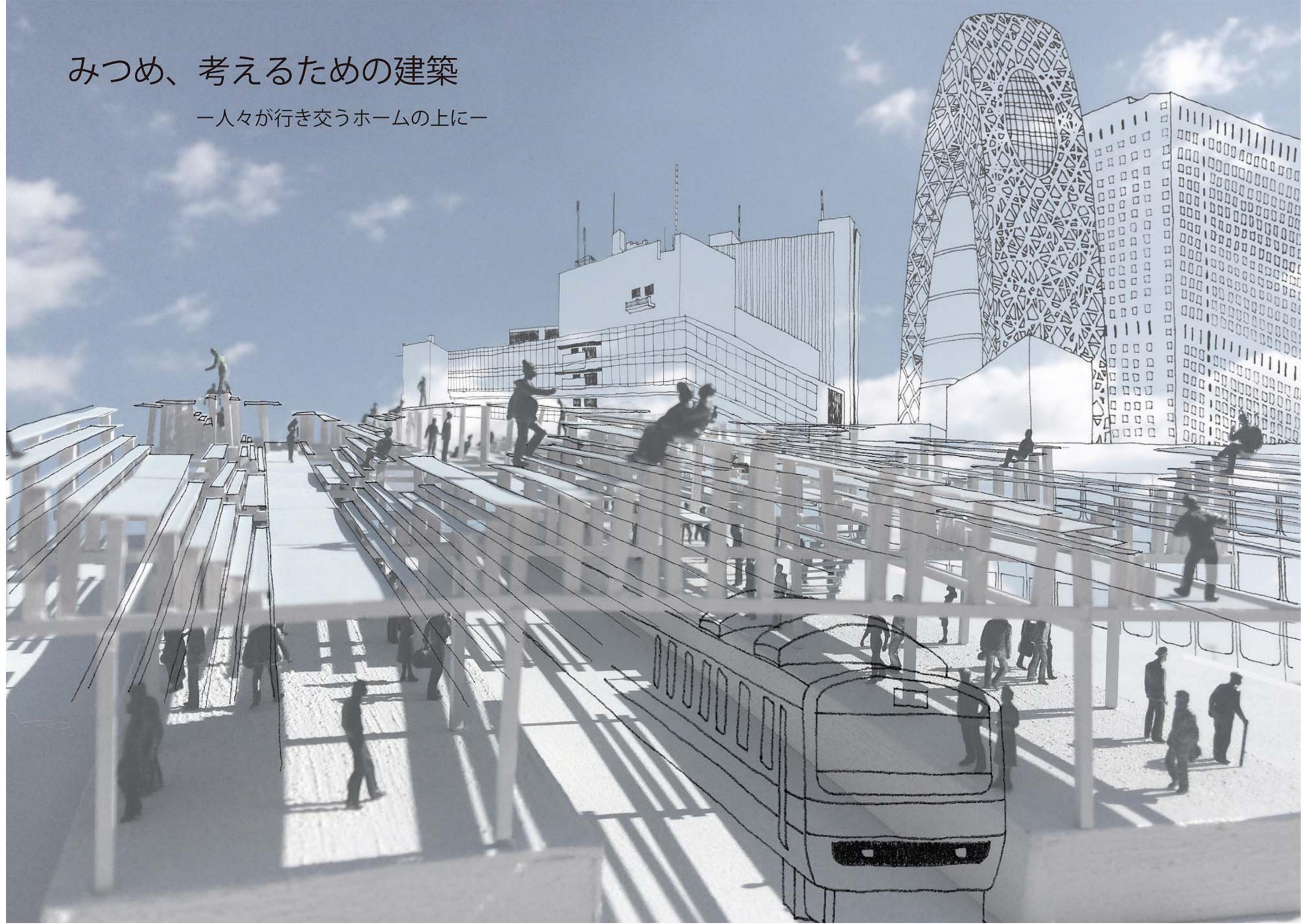


# みつめ、考えるための建築

一人々が行き交うホームの上にー

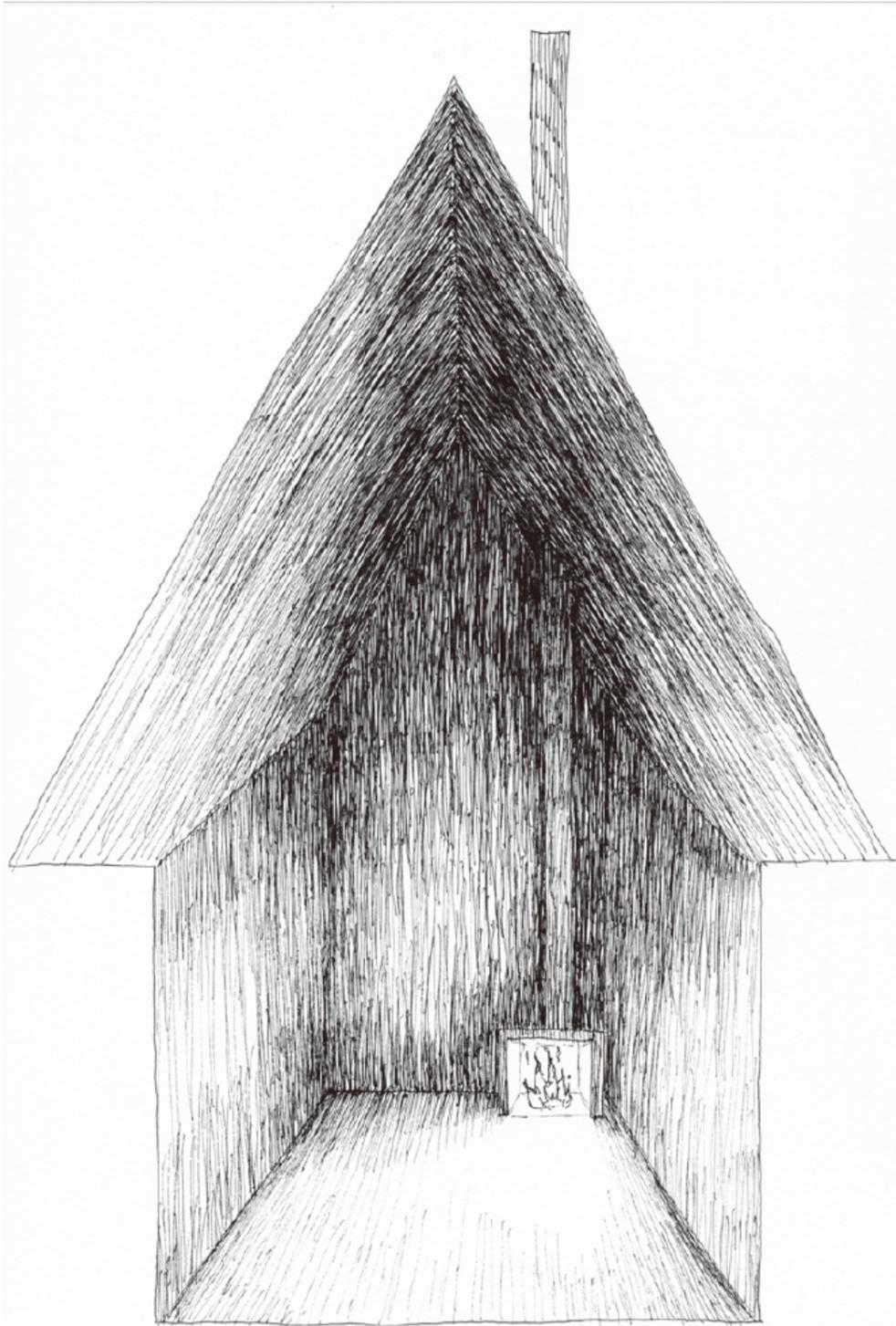


## 建築の役割

現代の東京のまちのなか、考える時間も場所も持たない人が多いのではないだろうか。現代人は、取り決められた流れに乗り、常に誰かの発信した情報を摂取し続けながら、それらを反芻し吟味する時間をなくしてしまった。この状況に危機感を感じる。

建築とはそもそも、その囲われた場所に入って外界から距離を置き、そこからじっくりと外の世界に向き合う。それとともに、自分の内面とも向き合い、自分を整理する。そんな時間を囲うものでもあったのではないだろうか。そして人は外の世界と囲われた内側の空間とを行ったり来たりし、そのリズムの中で時を刻んでゆく。

建築とは、見つめるための空間、であってほしい。灯台のような、天文台のような建築の中から、人は外の世界をみつめる。自分の中に広がる世界もみつめる。



「森の生活」(著：H.D. ソロー) より<森の中の手作りの小屋>

「動物は雨風をしのぐことのできる場所に寝床をつくり、それを自分の体温であたためただけだ。ところが人間は火を発見したので、広い部屋に空気を閉じこめ、自分の体温を奪われることなく部屋を温めて、寝床として使い、窮屈な衣服を脱いでそのなかを自由に動きまわり、冬のさなかにいよいよ夏の状態を保ち、窓を穿って光まで探り入れ、ランプをもつて星の時間を延長する。こうして人間は本能を超えて一歩二歩と前進し、芸術の創造のためにわずかな時間を浮かせようとする。」

以下、暖房に関して1年目と2年目それぞれの小屋の様子についての記述抜粋

「夜間、暖房に火を入れはじめたのは、家のしっくいを塗る前のことだったが、壁板のあいだには無数の透き間があいていたおかげで、煙突からの煙のほけあいは上々であった。私は、動だらけで粗削りの褐色の板や、覆上高く張り渡されている樹皮のついたままの垂木に囲まれ、この涼しく風通しのいい部屋で楽しい暮夜がすごした。しっくいが塗られたあとの方が家は確かに住み心地がよくなったものの、前ほど目を楽しませるものではなくなってしまった。人間の住む部屋はすべて、覆上にはの暗い空間をつくり出せるほど高く、夜は垂木のあたりに火影がちらちらと揺れ動くように建てるべきではあるまいか? そうした物影のほうが、プレスコ画とか、おそろしく高価な家具類よりも、人間の空想や想像にずっと気持ちよく訴えかけてくる。」

「翌年の冬には、換気のために小さな調理用のストーブを使った。森は私のものではなかったからだ。ところがそれは、口のあいている暖炉ほどには火の持ちがよくなかった。そこで、調理の大部分はもはや詩的な営みではなくなり、単なる化学的変化の過程になってしまった。昨今のようなストーブの時代ともなると、かつてはジャガイモをインディアン流に灰のなかで焼いたことも、まもなく忘れてしまうだろう。ストーブは場所をとり、室内を奥くするばかりでなく、火そのものを隠してしまうので、なんだか頼しい仲間を失ったような気がした。火のなかにはいつもひとつの顔が見える。労働者は、夜になるとそれをじっと見つめることにより、日中にこびりついた汗や俗世の汚れを取り去って、おのが思想を浄化する。ところが私は、もはや椅子に座ってじっと火を見つめていることはできなくなってしまったのだ。」

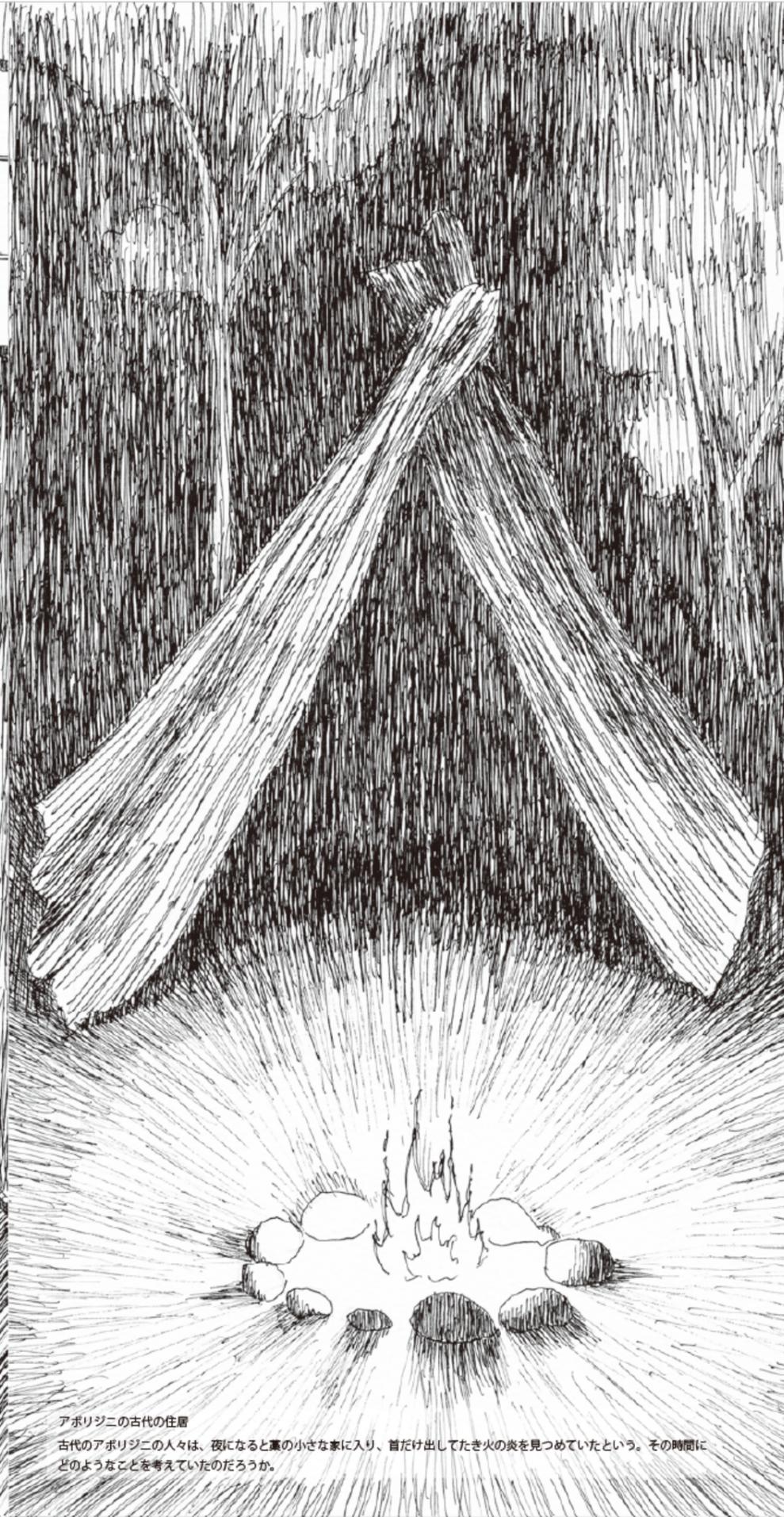
ソローの、暖炉と、覆上にはほの暗い空間がある小屋では、生きるための調理や食事という行為や暖房というシステムと、想像、瞑想といった行為が、ひとつの囲われた空間のなかで境界線なく同時に存在している。暖をとりながら火を見つめ、物思いに耽る。夜になり明かりを灯せば、屋根裏の暗がりや想像力に奥行を持たせる。



「陰翳礼讃」(著：谷崎潤一郎) より<闇>

「日本の闇は実に精神が安まるように出来ている。それらは必ず母屋から離れて、青葉の匂や苔の匂のして来るような補え込みの陰に隠れてあり、廊下を伝って行くのであるが、そのうすぐらい光線の中にうすくまって、ほんのり明るい襷子の反照を受けながら冥想に取り、または窓外の庭のけしきを観める気持ちは、何とも云えない。」

谷崎の言う闇という空間は薄暗く、それゆえ、不浄の境界が曖昧である。そして、そうしてはっきりと境界を引かず、薄暗い中にぼんやりと存在させておくのがいいのである、と述べている。様々な景色やものや観念や行為が重なり合う空間にいと、ふと人は物思いに沈んでいつたりするのであろうか、と考える。



アボリジニの古代の住居

古代のアボリジニの人々は、夜になると薫の小さな家に入り、首だけ出してたき火の炎を見つめていたという。その時間にどのようなことを考えていたのだろうか。

**反道具的空間**

現代の都市において人が考える時間を失った要因として、都市が道具で溢れ返っている状況を挙げる。その状況に対する改善策を探る中で、山崎正和が著書「装飾とデザイン」の中で用いている「反道具」という言葉に着目した。

反道具は道具の対となるような非機能的な存在として登場する。著者は、道具が生産のための手段であり、人の行動を定式化、習慣化するものであるのに対し、反道具は消費のための手段であるとし、さらにそれ自体として注意を要求する個物であり、みずからの周りに非日常という別種の時間を形成するものであると述べ、例のひとつとして日本の茶室を挙げている。

道具という存在で溢れた日常の中で過ごす人々は、考えることを省いてしまう。そこで、人が思考する姿勢を保ち続けるためには、日常の枠組みの外側からモノゴトを眺めることのできる、反道具的空間が必要であると考え。それは何かを得るために過ごす場ではなく時間を過ごすことで何かを得ることができる場所であり、人はみつめ続けることにより、そこからみる景色に反道具としての何かをみとめることができるようになるのではないだろうか。具体的に、反道具的空間とはどのような空間なのであろうか。自分の感覚、過去の体験と文献から得た他の人の感覚、体験、意見を照らし合わせながら、過去における反道具的空間、また現代において日常の中に埋もれて存在するそのような場所、場面を採取した。

**反道具的空間とは**  
 「それ自体として注意を要求する個物」  
 「みずからの周りに非日常という別種の時間を形成するもの」  
 例として茶室、特に障り口や、社交のための衣装、レースなどが挙がる



わざわざ入りにくい入口から体をかがめて入ることで気持ちを切り替える

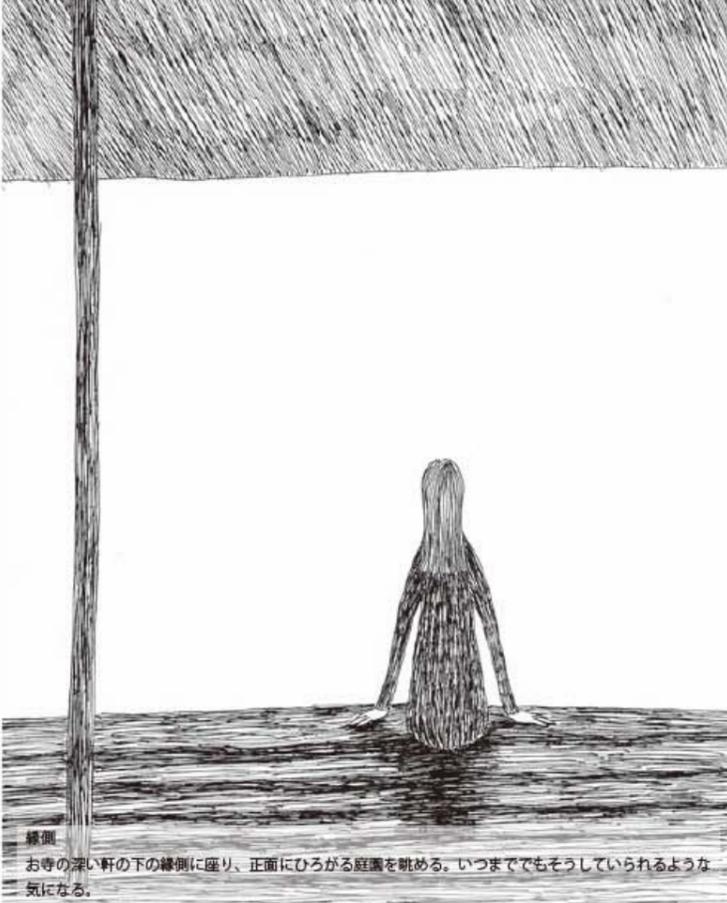


**画家の目**  
 画家は様々なモノゴトを反道具としてとらえ、その目や身体でとらえたものをキャンバスに焼き付けようとしているのかもしれない。



川の流れをみつめているとき、反道具をみつめている？

**反道具的空間の採取**



**縁側**  
 お寺の深い軒の下の縁側に座り、正面にひろがる庭園を眺める。いつまでもそうしていられるような気になる。

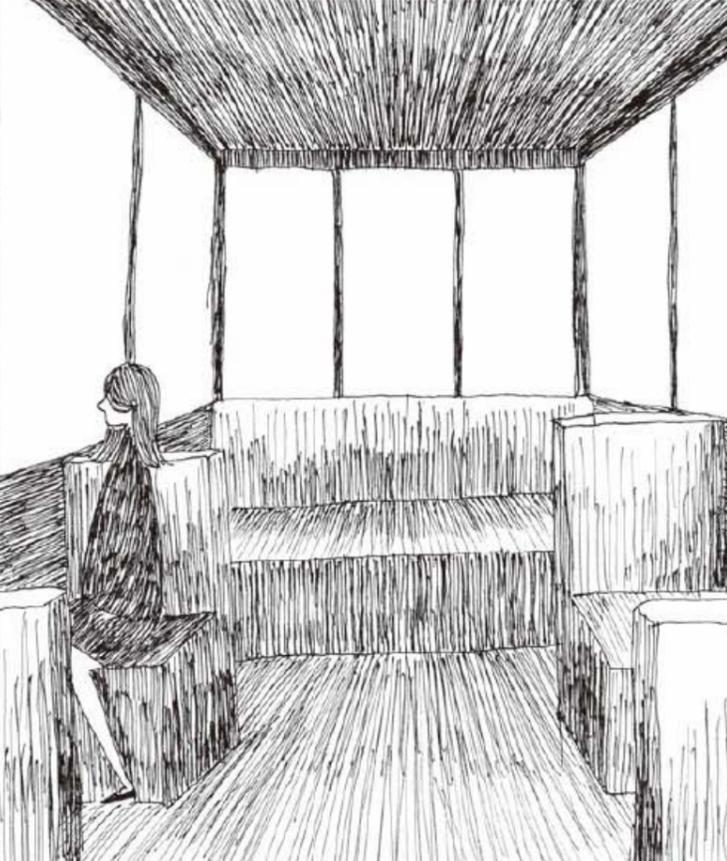


**押入れ**  
 押入れの中からそっと覗いた世界は、なんかいつもと違って見える。いつも自分がある場所が、少し知らない場所のように映る。

**テーブルの下**  
 大人たちが宴会をしているテーブルの下にもぐり込んだとき、薄暗いなかで背中をかがめて重心低くこそこそしていると、いつもより食器のふつかる音やおしゃべりの声が鮮明に聴こえてくる。小さな声で話しながら、テーブルのまわりの状況をうかがう。



**日中の車内**  
 日中の電車やバスに乗ると、朝や夜とは違う時間が流れている。明るい窓の外を流れていく風景が印象に残る。歩いている人、ペランダの洗濯物、信号の移り変わり。



**要素の抽出**  
 採取した反道具的空間からポイントとなる空間的要素を抽出し、さらにそこから導き出した操作として以下を用いて設計を行う。

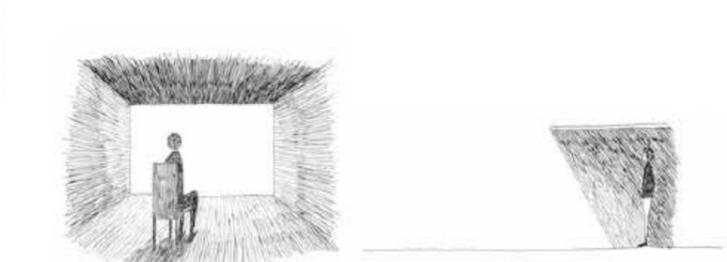
- ・目線を変える
  - 世界を少し新鮮に捉える
  - 世界から心理的に距離を置く
  - ！窓の開け方（視界の切り取り方）



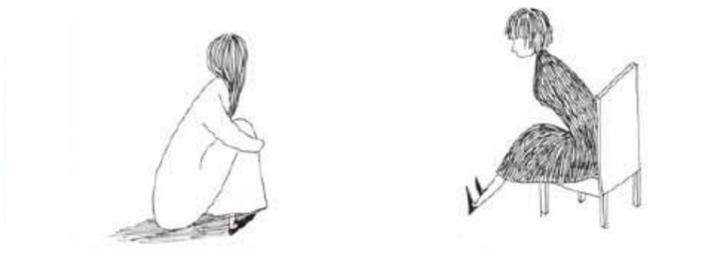
|| 高さ（観察者の立ち位置、視線の高さ）



- ・暗い中から明るい外を眺める、中と外との照度の差をつくる
  - 外の世界の解像度を高く見せ、視覚の感度を上げる
  - 中にいる自身の存在感を薄める



- ・重心を低くする
  - 自身の身体性をより感じ、自分という団体を意識する
  - 腰を据えて落ち着いて眺める

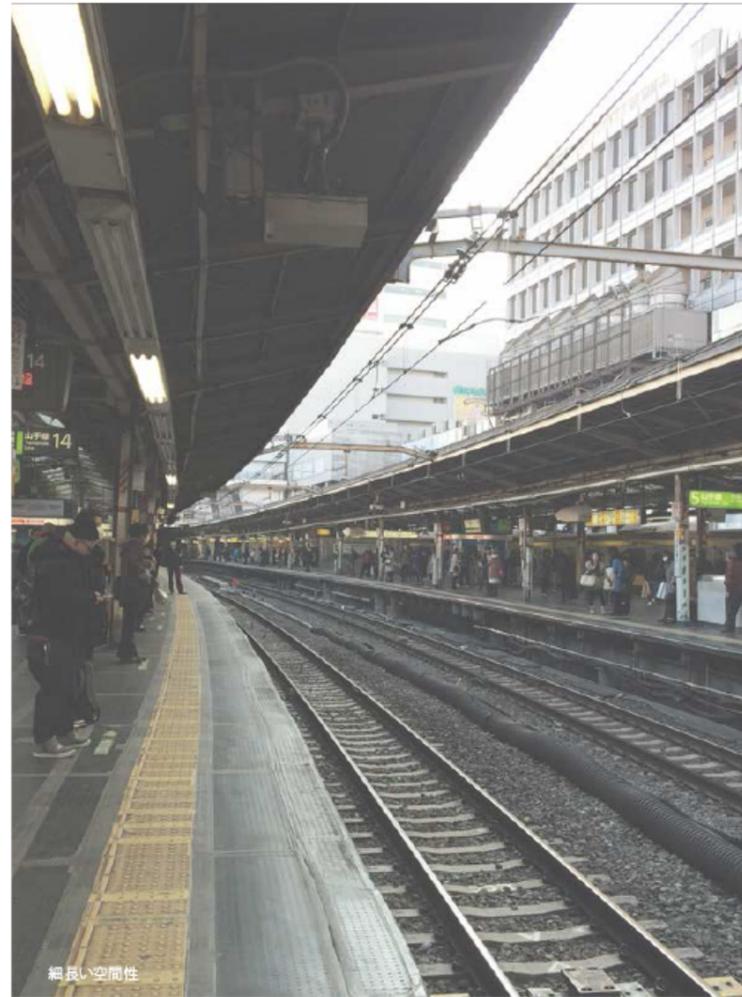


- ・素材感の違い
  - マットな表面は存在感を和らげ、光沢のある面は周囲のものとの存在を映し出す

人が、「わからない自分自身」をみつめたり、既存概念としてスルーしているものにもう一度、未知を見つけたりするような時間を内包する場所や場面としての建築を考えたい。

敷地

今回は「電車」「線路」「プラットホーム」という、道具およびその道具のためにつくられた空間に着目、そのすきまを見つけ、反道具的空間を挿入する。実際の場所として東京で最も利用者数の多いJR山手線、そのなかでもターミナル駅として多くの人が行き交う新宿駅を対象とする。



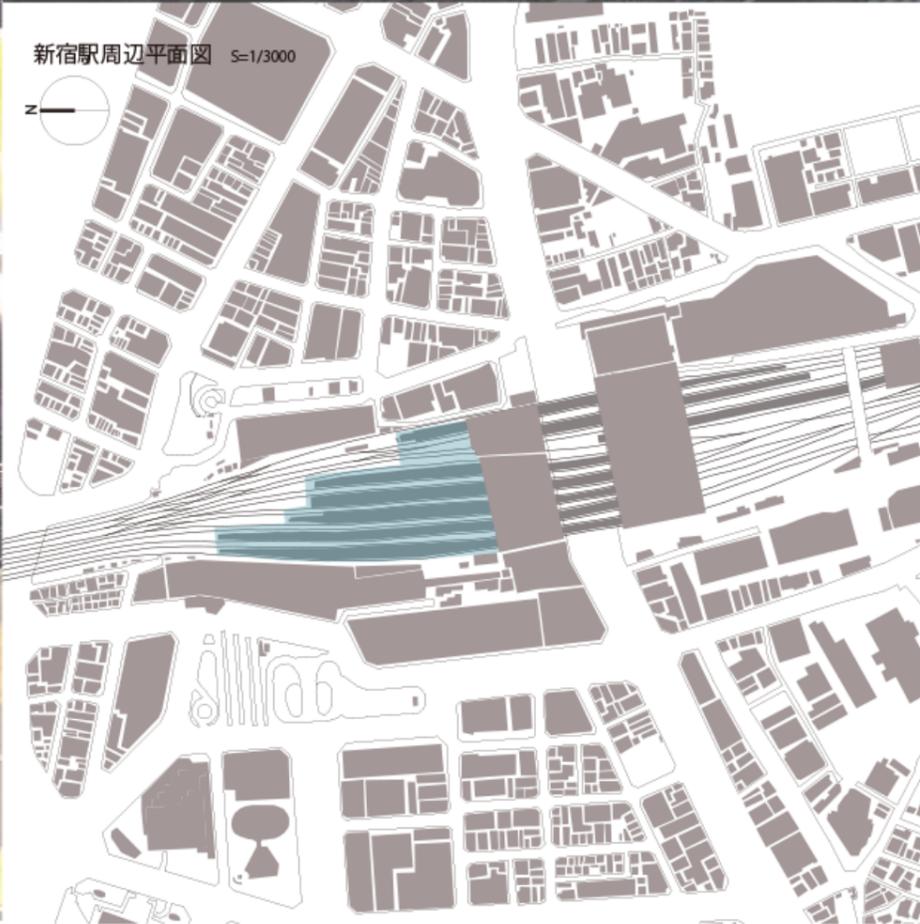
細長い空間性



ホームの上には明かりのない、空にひらけた空間がある



川のように様々な人が行き交う



# 設計について

電車を待つ間、次の予定まで空いた時間、家に帰る前に一息つきたい時。ひととき、ホームの上、ビルの谷間のぼっかり空がみえる空間に上がり、ぼんやりするかもしれない。そこからは、行き来する電車や人、いくつも並ぶビルの窓、空を流れる雲がいつもとは違う風に見えるかもしれない。何となく、日々の生活の中で繰り返しその場所を訪れるうちに、その何ともない時間が実は大切な時間になるかもしれない。ぼーっとしているうちに何かを考えはじめ、その考え事の続きは電車の中へ、家のトイレの中へ、お風呂の中へと続くかもしれない。そうしてホームの上がきっかけとなり、みつめ、考える姿勢が1人1人の、思い思いの場所へと続いて行くことを期待する。

